

川端康成「みづうみ」論

赤坂 かおり

1

川端文学を読み解く上で、まるで定石のように触れられるのは、「孤児」という、彼の生い立ちである。

川端康成は明治三十二年（一八九九）、大阪市北区此花町一丁目七十九番屋敷に生まれる。二歳の時に父が死に、三歳の時には母が死ぬ。両親を失った川端は祖父母の家に引き取られたが、その祖母も川端七歳の時に死に、それ以降、彼は祖父との二人暮らしとなる。祖父は盲目であり、最後は寝たきりになっていた。祖父は川端が十四歳の時に亡くなる。こうして川端は孤児となるのであった。

死期迫る祖父との日々を、十四歳の川端は日記にしたためていた。それを元にしたのが「十六歳の日記」という作品である。（1）

「ぼんぼん、豊正ぼんぼん、おおい。」死人の口から出さうな勢ひのない聲だ。

「ししやつてんか。ししやつてんか。ええ。」

病床でじつと動きもせず、かう唸つてゐるのだから、少女まごつく。

「どうするねや。」

「尿瓶持つて来て、ちんちんを入れてくれんのか。」

仕方がない、前を捲り、いやいやながら註文通りにしてやる。

「はいつたか。ええか。するで。大丈夫やな。」自分で自分の體の感じがないのか。

「ああ、ああ、痛た、いたたつたあ、いたたつた、あ、ああ。」おしっこをする時に痛むのである。

苦しい息も絶えさうな声と共に、しびんの底には谷川の清水の音。

（中略）

「おみよ、おみよ、おみよ。」と呼ぶ声が、息苦しく、高くなる。

「なんや。」

「ししやつてんか。」

「はあ、おみよはもういんだ。夜の十時過ぎや。」

「御膳食べさしてんか。」

私は呆れてしまった。

祖父は脚も頭も、くしゃくしゃに着古した絹の単衣物のやうに、大きな皺が一杯で、皮をつまみ上げると、そのまま元へ戻らない。私は大変心細くなった。

四十九歳になった川端は「あとがき」で、「祖父が死にさうな気がして祖父の姿を写しておきたく思つたにはちがひないが、死に近い病人の傍でその写真風な日記を綴る十六歳の私は、後から思ふと奇怪」だと書いている。確かにその通りであるし、十四歳の川端少年の眼差しには、唯一の肉親に向けるような感傷的な温かさがほとんど感じられない。どこか冷たく、冴え切っている。この日記から「作家・川端康成」の匂いを感じ取らずにいられないのは何故だろうか。それは恐らく、十四歳の川端が祖父に向ける眼差しが、その後の川端の生涯を通して貫かれる「他者」への眼差しとなり、それが各作品の主人公の「眼」として生きていくからである。

祖父は盲目である。たとえ川端が祖父の顔をじつと凝視したとしても、祖父は決して川端を見返すことはない。見る側（川端）の視線は常に一方的であり、見られる側（祖父）が見る側に働きかけることは決してない。この一方的な関係性は、「モノ」を見る場合と同じではないだろうか。尿瓶に溜まる尿の音を「谷川の清水の音」と聞き、皺だらけの体を「着古した絹の単衣物」と見

る。「モノ」を見る眼によって捉えられる祖父は、そのすべてが他と代替可能な「モノ」に変換されてしまっているのだ。

しかし、人間をこのように「モノ」化する彼のまなざしは、見る者すなわち彼自身にどのような影響を及ぼすのか？

「あとがき」と「あとがき」には、それぞれ次のような一節がある。

ところが私がこの日記を発見した時に、最も不思議に感じたのは、ここに書かれた日々のやうな生活を、私が微塵も記憶してゐないといふことだった。私が記憶してゐないとすると、これらの日々は何処へ行つたのだ。どこへ消えたのだ。

（「あとがき」）

この過去に経験したが記憶してゐないといふ不思議は、五十歳の現在も私には不思議で、私にとつてはこれが「十六歳の日記」の第一の問題である。

記憶してゐないからと言つて、過去のなかへ「消えた」とも「失つた」とも簡単には考へられない。またこの作品は記憶や忘却の意味を解かうとしたものではない。時と生との意味に触れようとしたものでもない。しかし、その一つの手がかりとなり、一つの証となることは、私には確かである。

記憶の悪い私は記憶といふものを固くは信じない。忘却を

恩寵と感ずる時もある。

〔あとがき二〕

ここには過去の経験と記憶との間の不思議な関係が語られている。記憶がない。しかし、記憶がないことは、経験が「消えた」ことも「失った」ことも意味しない、という。

もしも彼の経験の内実が、人間の「モノ」化であったとするならば、彼は自分の経験を消すことも失うこともできない、一種のモノにしてしまったのかもしれない。それは確かにあったのだが、ただモノとしてあるのみで、彼はそれを、現在につながる生きた過去としての「記憶」にすることは決してできない。ここで語られているのは、そのような事態なのだろうか。

人間ないしは世界そのものの「モノ」化と、記憶になりえぬ経験、――この二つの視点を留意した上で、「みづうみ」という作品に入ってゆくこととしたい。

2

「みづうみ」(「新潮」昭29・1・12)は、ストーリーカーの元教師・桃井銀平の物語、ととりあえずは言える。彼が狙った女は、まず教え子・玉木久子(肉体関係を結び、一時密会を重ねるが、後別れる)、行きずりの女・水木宮子(銀平は、彼女に投げつけられ

たバッグの中から大金を見つけ、それを持ち逃げする)、および宮子と多少関わりのある少女・町枝。この他に、宮子の金を使つての逃避行の途中、上野駅周辺で出会つたゴム長靴の女、軽井沢のトルコ風呂の湯女が、銀平に関わる女である。

また、これとは別に、久子の友人・恩田信子、水木宮子を妾として囲う有田老人、宮子に仕える女中・たつなどが作品に登場する。しかし、こうした多彩な登場人物が複雑な人間ドラマを展開するかというと、そうとはかならずしもいえない。彼等の幾人かは、その精神のあり方において、それぞれ互いに分身のような同質的關係にあるように思われる。そこでまず、右の登場人物の何人かについて、分身関係・対立関係を明らかにしておきたい。

銀平が最初に後をつけたのは、教え子である玉木久子という少女であった。後に二人は男女の關係を持つが、そんな二人の間で邪魔しようとするのが、久子の親友・恩田信子と、久子の父親である。

久子の後をつけた翌日、銀平は自分のストーリーカー行為を秘密にするようにと久子に口止めをする。だが、久子はすでに恩田に打ち明けてしまつていた。銀平は恩田を呼び出し、久子とのことを秘密にしてくれるように頼み込む。しかし恩田は「正義感よりも直感から出た糾罪感」による憎悪の目を銀平に向け、「先生は不潔です。」と言つて切り捨てる。恩田が銀平達のことを校長と久子の父親とに密告したために、銀平は教職を追われることになり、

久子も転校を余儀なくされる。

その後銀平と久子の二人は、久子が戦前住んでいた家の焼け跡地での逢引きを重ねるが、銀平が久子の手招きによって彼女の部屋に忍び込んだところを家族に見つかるといふ事件以降、久子の父親は彼女が外出することを禁止し、学校にも行かせなくなった。こうして銀平と久子は隔てられてしまい、破局へと至るのである。

以上から明らかなように、恩田と久子の父親が、銀平と久子に対立する者であるのは当然なのだが、ここで注目しておきたいのは、彼らに言及する時に窺われる銀平の彼らに対する屈折した不快感ないしは嫌悪感である。

銀平は久子の後をつけて彼女の家まで辿り着いた時、その立派な邸宅ぶりに驚く。戦後に買った家であることを久子から聞くと、銀平は久子の父親が「闇に類する不正か犯罪」を行ったのであると推測する。そして久子の父親が水虫の皮をむしっている姿を思い浮かべる場面で、「僕ら水蟲なんて知らんね。あれはぜいたくしてゐる、やはらかい足に出来るんぢやないのかね。高尚な足に下品な病菌がつく。人生つてそんなものだ」と言い、久子の父親に対する嫌悪感を顕にするのだが、これは後述するように、明らかに銀平自身の足にまつわる劣等感と絡まり合っているものだ。

恩田信子についてはどうだろうか。授業中、恩田以外の女生徒達が笑った時、銀平は恩田に向かって「みながおもしろさうに笑

つたら、笑つてもいいんじゃないか。」と言う。すると、恩田は「みなといつしよに笑つてもいいでせうけれど、みなが笑つた後で、追いつくやうに笑はなくてもいいと思ひます。」と答える。そんな恩田のことを銀平は「成績がよかつたが自我も強いようだつた」と感じ、嫌悪する。恩田は久子が転校してしまつてからは一度も久子と連絡を取ることとはなかつたのだが、卒業が近づいた頃から何度も会いたいという手紙を出している。実は恩田は、大学へ進学したいのだ。しかし家が貧しいために、入学するための資金が足りない。そこで久子にも大学へ進学することを勧め、ともに学校に行つていなかつた久子の家庭教師に自分になることで、それを恩にさせて久子の父親に自分の学費を出させようという魂胆があつたのである。恩田は、そういうしたたかさを持つた「自我も強い」人間である。

久子が銀平のストーカー行為を恩田に話してしまつたことを知つて、銀平が口止めする場面で、久子は、恩田とはお互いに何の秘密も持たない仲であるから、それは出来ないと言う。すると銀平は次のように捲くし立てる。

「とにかく、おたがひになんの秘密もない親友なんていふのは病的な空想で、女の子の弱点の仮面だね。秘密がないのは天国か地獄かの話で、人間の世界のことぢやないよ。君が恩田さん」に秘密がないなら、君は一人の人間として存在もしてゐないし、

生存もしてみないわけだ。胸に手をあてて考へてごらん。」

この一節は、はからずも銀平の自己認識および他者認識を種明かししているようだ。銀平は恩田に秘密があることをもちろん知っている。だから恩田は「一人の人間」「人間の世界」の住人である。しかし、久子、お前は俺とともに、実は「病的な空想」の世界の住人なんだよ、だからこそ私たちは結びついたのだし、そうした私たちを彼らは邪魔しようとするのだよ。久子、相手を間違えてはいけない……。だいたいこんなところであろう。闇市に関わる仕事で稼ぎ、その金で現在の豊かな暮らしを得ている久子の父親と、久子への恩に縋って自分の望む未来を得ようとする恩田は、どちらも生活能力に長け、現世を生き抜くための強い自我を持った存在である。銀平は、彼らを嫌悪し、時に恐れ、その存在に脅かされるのである。

〈銀平・久子〉対〈恩田・久子の父〉という、この対立関係は、〈銀平・久子〉の分身ともいふべき、〈有田老人・宮子〉の物語においても、同様に存在している。言うまでもなく、女中・たつの存在である。

宮子は銀平のストーカー被害者のひとりだが、銀平をめぐるストーリーにはほとんど関与せず、もっぱら有田老人の物語の主要人物だといえる。彼女は二十五歳という若さでありながら、七十歳近い有田の愛人として生活している。独り暮らしであり、家に

はたつとその娘のさち子が女中として働いている。

たつは宮子に「私は奥さまの身方です。むざむざと若い血を、おぢいちゃんに吸はせておいてたまるもんですか。」と言い、宮子に色々を入れ知恵をする。有田と旅行に行った際の宿代のくすね方まで教えて、宮子に金を貯めることを勧め、また有田には秘密で、たつ名義の通帳まで作らせていた。もちろんたつは、宮子に教えた貯金の仕方と同じように、宮子や有田の金を掠め取りながらこつこつと金を貯めている。そのように宮子に擦り寄る一方で、実はたつは、娘のさち子に宮子から有田の愛人という立場を奪わせようとしているのである。そうすることで自分がより多くの利益を得られるようにと画策しているのである。たつはさち子に行儀作法をしっかりと仕込み、香水まで使わせて有田の気を惹かせようとする。宮子がそのことに触れてもたつは動揺しない。企みが宮子に気づかれてしまうと、全く気にしないのである。宮子も銀平と同様、強い自我を持つ存在であるたつを嫌悪する。だが、それと同時にたつの「蟻のやうな根性」を見くびれないものであるとも感じ、銀平の場合より一層彼女、というか彼女のようなタイプの人間を恐れる気持ちを強く抱いているのである。

以上のように、〈銀平・久子〉〈有田老人・宮子〉に対立する〈恩田信子・久子の父〉〈たつ〉が、いずれも「人間の世界」を生きるしたたかさを備えた存在であることは、逆に〈銀平・久子〉〈有田老人・宮子〉の正体を示唆しているといえるだろう。彼らはい

ずれも「人間の世界」から何がしか外れた存在なのにちがいない。つまり我々は、失職者のストーカー銀平と会社社長兼高校理事長等の肩書きを持つ有田老人について、その表面的な差異を超えた、両者の同質性を見抜かなくてはならぬということである。

3

銀平が追いかける女達は、《魔》と《聖》の二つのグループに分けることができる。前者は久子と宮子、後者は町枝とトルコ風呂の湯女である。まず《魔》に属する久子と宮子について考察していこう。

久子と宮子に共通するのは、「魔界」、「魔族」といったイメージである。銀平は久子の「魔力」に誘われ、「前後不覚の酩酊か夢遊のやうに」その後をつける。宮子の場合も同じく彼女の「魔力」に誘われ、銀平は「自分を失った」ようにその後をつける。銀平は宮子のことを「同じ魔界の住人」だと感じたが、より注目すべきことに、宮子を求めるもう一人の男、有田もまた、宮子の中には「目に見えない魔もの」が住んでいるんじゃないかと言っている（やはり彼等は同じ穴の貉なのである）。有田からそう言われた宮子は、「人間のなかに人どちがつた魔族といふやうなものがあて、別の魔界といふやうなものがあるのかもしれないわ。」と答える。自分が《魔》に属する者であるということ、宮子は

自覚しているようだ。そんな宮子は銀平に後をつけられたことで「全身が激痛のやうな恍惚にしびれ」るやうな快感を覚え、たのであった。

銀平が後をつけてあるあひだ、宮子はおびえてあたにちがひないが、自身ではさうと気がつかなくても、うづくやうなよろこびもあつたのかもしれない。能動者があつて受動者のない快楽は人間にあるだらうか。美しい女は町に多く歩いてゐるのに、銀平が特に宮子をえらんで後をつけたのは、麻薬の中毒者が同病者を見つけたやうなものだらうか。銀平がはじめて後をつけた女、玉木久子の場合には明らかにさうであつた。

（傍点論者）

「同病者」という言葉は、意味深長である。その病の正体を、「二人の中にある劣等意識」とみるのは今村潤子氏である（2）。「銀平には、猿のように醜い足を持っているという劣等意識がある。（中略）一方、宮子には、自分が七十才の老人の妾であるという劣等意識がある。そういう劣等意識を持った者同志が、一方は美に対する憧憬を、もう一方は自分の青春に対する憧憬を燃焼させるべく感応しあうのである。」と述べている。つまり、銀平と宮子の抱える「同病」とは「劣等意識」であり、それが宮子の「魔

力」であるということだ。しかし、「劣等意識」「イコール」「魔力」という図式は、宮子にのみ当てはまるものであつて、久子には当てはまらない。久子には「劣等意識」など無いからである。二人に共通するものでなければ、「魔力」の説明にはなるまい。

久子と宮子に共通するのは、その存在の脆弱性・一種の弱さにある、と思う。

自分にストーカー行為を仕掛け教職を追われた男のために、母親のへそくりを盗み出すなど、銀平と肉体関係を持つてからの久子は途端に大胆な少女へと変身する。兵藤正之助氏はそんな久子のことを、銀平の言葉を借りて「異常な性格」と言い表わしている(3)。しかし、そういった行動を取ったのは、久子が強い女だったからではなく、まさにその逆であろう。初めての異性体験によって自身の内に目覚めた「女」に対して覚えた興奮と戦慄は、久子固有のものではなく、女性一般のものだが、久子は内に芽生えたそうしたおのきにたちまち自我を占領されてしまう。銀平に見抜かれ、彼との間に肉体関係まで許してしまったのは、久子固有の弱さだったのだ。突然別れを告げたことも、銀平とある程度の時間、距離を置いたことよつて興奮状態が収まっていった結果と見るべきであろう。

その後久子は結婚し、銀平との逢引きの場所であつた戦前の家の跡地に新居を建てそこに住む。銀平と別れてからの久子の動向は、結婚したこと以外は不明である。恩田が大学進学を勧めてい

たが、果してどうなったのであろうか。久子の新居の普請が始まったのは銀平がまだ東京にいて何度かその跡地を訪れた後の一年半から二年後のことであり、もし久子が大学に進学していたとすれば在学中のはずであるから、そんな時期に結婚とは考えにくい。恐らく久子は進学しなかつたのであろう。そして結婚自体も父親が手を回したものだつたらうし、新居が以前住んでいた家の跡地に建てられるということも、久子が父親の支配下から抜け出す力を持つていなかつたことを示しているであろう。このように久子の自我は父親によつて押さえ込まれてしまうものであり、同級生の恩田と比べても、それはいかにもか弱いものであるといえる。兵藤氏の言うような「異常な性格」と呼ぶべきものとは言えないだろう。

一方、宮子は小さい頃から弟の啓助と性別が変わればよかつたのにとまわりから言われていたというから、恐らく活発で行動的な人間だったのであろう。ところが有田に囲われるようになってからは「怠けげな気が弱くな」つてしまう。何事にも気が失せてしまった宮子には、何故たつがあんなに張り切つて動き回っているのかが不思議に思えてならないほどである。

とにかくたつの生活は一種の健康で、宮子は一種の病気にちがひなかつた。宮子の若い美しさは消耗品であるのに、たつは自分のなにも消耗しないで生きてゐるかのやうであつた。

宮子は有田に囲われたことで若い性の解放の道を閉ざされ、「希望を失つ」てしまったように描かれている。しかし宮子をこのような状態に引きずり込んだのは有田であるというより、彼女自身である。有田は宮子の体から若さが失われていくことを恐れ悲しむが、宮子は、自分のことであるにもかかわらず、そんな有田に引きずられていく様にして、自身の体から若さが失われていくことを悲しむようになるにすぎない。そしてただただ性を空費し続けていく。たつのように自分の未来を切り開いていこうという意志を持つことも無い。宮子は、いわば自分を捨てた女である。ふたりの女の、こうした心の隙・弱さが、それぞれ「魔」を抱えた男どもを呼び寄せたにちがいない。

続いて《聖》に属する町枝とトルコ風呂の湯女について考察していこう。

久子と別れて後、銀平は新たに町枝という少女の後をつける。町枝の年は久子よりも下である。銀杏並木の坂道で、銀平は犬を連れて歩く町枝に話し掛けてみるのだが、ほとんど相手にされない。

町枝の次に銀平が後をつけたのが宮子である。銀平は宮子が落としていった二十万円を元手に逃避行を始め、秋口の軽井沢へと向かう。そこで「銀色の蛾の群れ」の幻に導かれるようにしてトルコ風呂へと辿り着く。そこにはミス・トルコと呼ばれる湯女が

いた。湯女の年は二十歳ぐらいである。湯女の場合、銀平は彼女の後をつける幻を見るだけであって、実際に追跡することはない。湯女は銀平の髪を洗ったり、マッサージをしたりするのだが、銀平の言動に段々気味悪さを感じていく。トルコ風呂での湯女との場面は第一部で展開されるが、時系列的には一番最後の出来事となる。

町枝と湯女の二人に共通するのは、「天界」、「天国」のイメージであり、それが銀平を惹きつける大きな魅力のようだ。銀平は町枝から「天上の匂ひ」を感じ、彼女の「奇跡のやうな色気」に捕らえられる。町枝は同性の宮子から見ても、「胸にしみとほつて来」るような美しさを持った、「聖少女」なのである。一方、湯女の場合は、何といつてもその「天女のやうな声」である。「花のかほり」のような湯女のささやき声を聞く度に、銀平は「耳から匂ひのやうな陶醉がしみ入」ってくるのを感じ、その声に惹きつけられていく。また、「永遠の女性の声か、慈悲の母の声」のように、銀平には聞こえてくる。そうした母的なものから「清らかな幸福と温い救済を感じ」、涙するのである。

《聖》に属する女に課せられた役割は、「天界」「天国」そして「母性」といったイメージを喚起しつつ、それを「みづうみ」に統合してゆくことである。

少女のあの黒い目は愛にうるんできがやいてみたのかと、銀

平は気がついた。とつぜんのおどろきに頭がしびれて、少女の目が黒いみづ、みのやうに思へて来た。その清らかな目のなかで泳ぎたい、その黒いみづうみに裸で泳ぎたいといふ、奇妙な憧憬と絶望とを銀平はいつしよに感じた。(傍点論者)

銀平の母はみづうみの傍の名家の生まれであり、美しい女性であつた。父は母に比べて格下の家の生まれであり、醜い男だつた。そんな二人の結婚は、母に言うに言われぬ事情があつてのことであらうと、息子の銀平が疑念を抱くほどであつた。銀平が数えて十一歳の時、父は母の里のみづうみで死ぬ。他殺とも事故ともつかぬ奇怪な死であつた。従兄妹のやよいの家では、何か面当てをされたやうに銀平の父を憎んだ。銀平の母は銀平を残して実家に帰つてしまふやうな心配をみせ、母を失つてしまふのではないかという動搖に銀平は怯える。従兄妹のやよいに初恋をしたのも、母を自分に繋ぎとめておきたいという気持ちがあつてのことだつた。しかし、やよいも周りの大人達に触発されてか、銀平のことを次第に疎んじ、露骨に見下すやうになる。そしてついに母は銀平を残し、実家に帰つてしまふのであつた。

変死の父よりも美貌の母が思ひ出される。しかし母の美しさよりも父の醜さの方がはつきり心に刻みつけられてゐる。やよひのきれいな足よりも自分の醜い足が見えて来るやうなも

のだ。

銀平には母方の「美しい」血筋よりも、父方の「醜い」血筋を強く引いているという意識がある。それはある時やよひに「銀平ちゃんの猿みたいな足は、お父さんそっくりだわ。うちの方の血筋ぢやないわ。」と言われたことで、決定的なものになつたやうだ。「足の甲の皮まで厚くてくろずみ、土踏まずは皺がより、長い指は節立つて、その節から不気味にまが」つている銀平の足は、父譲りの「醜さ」を常に意識させる。そしてそれゆゑに「美しい母」に捨てられてしまつたのだ、という認識によつて、銀平は「醜い足」に劣等感、というより、自己の存在そのものの否定の感覚を持つやうになる。つまり、銀平は「美しい」母を求め崇拜する一方で、自らが「醜」であることで、決して受け入れられないやうな絶望感を抱くわけである。銀平の「母性希求」は、常に「憧憬と絶望」というかたちをとる。それは永遠に全体性から隔てられた彼のゆがんだ自我の嘆きにほかならない。そしてそれを、銀平が後をつける女達にもまた「かなしみ」として感じるのだ。

銀平にはやよひの村のみづうみに山桜の花のうつつてゐるのが、はつきり心に浮かんで来た。さざ波もない大きい鏡のやうなみづうみだつた。銀平は目をつぶつて母の顔を思ひ出した。

銀平の意識に幾度となく現れる「みづうみ」は「美しい母」に繋がるものであり、安らぎの「母性」の象徴なのだが、しかし、そこはまた、銀平の父が溺死し、やよいの犬が取り殺した鼠の死骸が捨てられた場所、すなわち、醜いものを飲み込むところでもある。

トルコ風呂を出た銀平は、みづうみに遠くの岸の夜火事が映る幻を見て、「その水にうつる夜の火へ誘はれてゆく」ように感じる。銀平にとって「みづうみ」とは、彼の世界の中心に位置する、空虚としての、あるいは残骸としての自我なのであり、彼と同質の空虚さ・脆弱さを抱えた人々をたえず吸い込もうとしているのである。

4

銀平と有田老人の二人が重ね合わせられているといえるのは、次の一節に明らかである。

宮子は子供のやうに答へてじつとしてみると、老人の白毛の頭の上で、涙があふれて来た。明かりを消した。ハンド・バッグを拾ったかもしれない、あの男が宮子の後をつけようと決心した瞬間の、泣きさうにした顔が、闇に浮かんで来た。

宮子は自分の胸に顔を埋める有田の白髪頭から、「あの男」、つまり銀平の泣き出しそうにした顔を連想する。

有田は宮子を愛人として困っており、普段は梅子という三十代の美人家政婦と二人暮らしをしている。家政婦というのは名目上のことであり、宮子と同様、梅子も愛人のような存在である。ただし、有田は性的な理由だけで女を求めているのではない。

有田は三十代の頃、妻が嫉妬の拳句に自殺したことで「女の嫉妬のおそろしさが骨身にしみ」、以来嫉妬という嫉妬を遠ざけるようになった。つまり有田は宮子とは反対に自ら性の解放の道を閉ざして今日まで生きてきたのである。そして年を取り、死が差し迫る中で、有田は二人の女を困う。だが若い頃のような性の解放は、肉体的にすでに不可能となってしまうていた。有田が自分のことを、人生に「復讐される側」と言うのは、そのためである。有田が宮子の自堕落な生活にじりじりしていることは、せっかくの「若さ」を無駄にしていることへの苛立ちとも考えられる。宮子をそんな風にしてしまった原因は自分にあるというのである。

有田老人は梅子がすこぶる家庭的だと宮子に向つてよくほめるので、宮子は娼婦的なものをもとめられてゐるのだらうと感づいてもゐた。でも、老人が宮子にも梅子にも渴望してゐる。

るのは母性だといふことは、第一に明らかだった。

梅子には「家庭的なもの」を、宮子には「娼婦的なもの」を、有田は求めている。しかし、有田が何よりも求めているものは、銀平と同じように「母性」である。では、有田の場合はなぜ「母性」を求めるのか。

七十近い老人はこの若い二人に手枕されて、首を抱いてもらつて、乳をふくむと、お母さんといふ気持になる。この世の恐怖を忘れさせてくれるものは、老人にとつても母のほかにはない。
(傍点論者)

有田が母性を求める理由、それは、「この世の恐怖」を忘れ去りたいがためである。それでは、有田が抱く「この世の恐怖」とは、一体何であろうか。

羽鳥徹哉氏は、有田が七十歳という年齢でも尚、会社の社長であり、高校の理事長をも勤めているという点に着目し、「そうした出世の影では、多くの人を泣かしているに違いない。女性恐怖のようなものに加え、そうした彼の生き方から来るものが彼を恐怖させ、母性に救いを求めさせているわけである。」と述べている(4)。つまり「この世の恐怖」とは、言うなれば「社会的人間恐怖」とでもいったものと、「女性恐怖」の二つであるという。

確かに、社長という地位にまで登りつめた人間ならば、誰しもが少なからず「社会的人間恐怖」を抱くものかもしれない。しかし、有田のそういった社会的設定は、愛人を二人も囲えるほどの経済力を持った人物であることを裏付けるものに過ぎないのではないだろうか。有田がどういった会社の社長であり、どのように働いているのかといった、社会面での有田の様子は、ほとんど描かれていない。唯一明らかなのは、理事長を務める久子の学校で演説をしたことぐらいだろうか。その程度の描写から有田の「社会的人間恐怖」を読み取ろうとするのは、少々強引に思える。

一方、「女性恐怖」の感情は、確かに有田の中に根強く存在している。有田は二歳の時に実母と別れ、継母に苛められて育つた。母親からの愛情を受けることができず、反対に母という女を通して女性への恐怖心を植え付けられてしまった。さらに、妻の自殺によつて、その恐怖心は決定的なものとなる。「女性恐怖」から解放されるために、自分を無償の愛で包み込んでくれる母性を求めているということは、確かに言えそうである。しかし、それは有田が抱える「この世の恐怖」の、表層部分に過ぎまい。有田の場合、より重要なこととして、彼の幼児体験があるだろう。彼は実母とは二歳の時に別れているので、母の姿は記憶にはほとんど残っていない。反対に、自分を苛め続けた継母の記憶だけは老年の今も尚焼きついていて、そのような境遇で、母親の愛情を知らないままに育ってしまった有田が求めるのが、「自分を無償の愛

で包んでくれる母」だという。有田の「母性希求」の根底には、自分は生きていてよいのだろうか、という自己存在に対する危うさが窺われる。

第二部終盤、宮子に手枕されながら眠っていた有田は、突然うなされる。有田のうめき声は一階で寝ているたつとさち子にも聞こえる程のものだ。怯えるさち子に向かってたつは「なにがこはいもんですか。だんなさまぢやないか。こはがつてゐるのはだんなさまだよ。あれがあるんで、だんなさまは一人でよう寝ないんだよ。」と言う。睡眠時、有田はいつもうなされているのだ。

睡眠とは本来、心と体を休めるための安楽の空間であろう。その空間にいる間、本人は意識を喪失し、死んだ状態と何ら変わらなくなる。つまりそこは安楽の空間であるとともに、死の世界でもありうる。睡眠には安らぎと死の二重性があるわけである。しかし、普通の人間はもちろん睡眠に恐怖などしない。有田が睡眠中にうなされるのは、自己の存在の一貫性に対して、確信が持てないからであろう。眠りは、有田老人にとって、生の中斷、つまりは一時的な死なのだ。死の恐怖を癒せるのは、自らの生命の根源である母という存在しかない。それゆえに有田は女達を側に置き、「母性」に縋り続けるのであった。

銀平は《魔》なるものと《聖》なるものを持つ女性達を追いかけ、有田は「娼婦的なもの」と「家庭的なもの」を二人の愛人に

求めている。「魔」と「娼婦的なもの」は、そのどちらにも宮子が属しており、イメージ的にも一致するだろう。

また銀平の「みづうみ」と有田の「睡眠」が、同じ意味を持つたものであるのも明らかである。「みづうみ」と「睡眠」、どちらにも「安らぎ」と「死」の二重性があり、それが常に二人の心の中に存在しているのである。

5

「現在」における銀平にとつては、女の後をつけるということが彼の行動のすべてであると言つてよい。そしてその行為は究極的には「母の里のみづうみ」という「過去」への回帰願望の発露にほかならなかつた。銀平の意識の中には常にその「みづうみ」があり、どのような現実にも直面しても、銀平は連想、回想によつて「みづうみ」へと回帰してしまう。

「過去」と共に銀平の意識内に大きな位置を占めているのが「幻」である。銀平の「幻」への志向の強さは、第一部からすでに明らかである。

銀平はトルコ風呂の湯女から様々な施しを受けながら、聞えるはずの無いピアノの音を聞いたり、湯女が流し場を洗う音から古里の海を連想し、岩の上でくちばしを突き合っている二羽のかもめの幻を見るなど、様々な幻聴、幻覚を見る。第一部は銀平の意

識の自由奔放さが如実に描かれている。以降、宮子視点の第二部を除いた第三部、第四部からも、幻の頻度こそ低くはなるもの、ふとした拍子に幻想、回想、連想へと転がり込んでしまうという銀平の意識の特性を見て取ることができよう。

また銀平は「現実」と「幻」を明確に区別できない人物のようでもある。次の一節は蜜狩りの夜、銀平が土手下の道を歩くにつれて土の中から赤子が這って歩いてくる幻を見た時のものである。

幼な子が円い拳で力いっぱい銀平の額を打ち、父親が下向くと、頭を打ちつづけたことがあるやうだが、あれはいつだったか。それも銀平の幻で、うつつにありはしなかつた。

これは語り手によって書かれた地の文ではあるが、「あれはいつだったか。」と思ひ出そうとしているのは銀平自身であろう。銀平は赤子の「幻」を、まるで「現実」にあったことのように懐かしもうとしているのである。

以上から明らかなように、銀平は「現在」や「未来」よりも「過去」への志向が強い人物である。また銀平にとって「現実」と「幻」とは同列のものであり、その二つを分ける境界線はほぼ存在しない。そのような銀平は、果たして「現実」を生きていると言えるのであろうか。

銀平が女を追って歩いたやうに、その金は魂のあるやうないやうな生きもので、銀平を追って歩いた。銀平が金を盗んだのははじめてだった。盗んだといふよりも、金は銀平をおびえさせながら、はなれてゆかうとしてくれなかつた。

この一節を引用した白石文子氏は、「この時から銀平は、事実上の逃走者になる。金を盗んだのは事実だが、女から訴えられないのだから犯罪となるのかどうかわからない。罪なき罪の意識としての実体のない追跡者から逃れて彼は放浪する。」と述べている(5)。つまり宮子の金を銀平の罪の意識の象徴と見るものである。このような論は数多い。逃避行の果てに辿り着いたトルコ風呂でも、銀平は蒸し風呂の板に首を挟まれて思わず「断頭台だ。」と言って怯えたり、赤子の幻から「牢獄の暗い壁が四方から」迫ってくる幻を連想して冷汗するなどしている。確かに銀平は罪の意識につきまとわれているようである。

しかし、この一節はそういった銀平と金との関係性を示すばかりではなく、銀平の「正体」を明らかにするものでもあるのだ。「金が銀平の後を追う」ということと、「銀平が女の後を追う」ということが重ね合わせられている点に注目しなくてはならない。金が罪の意識として銀平の後を追いかけてきたやうに、銀平もまた女を怯えさせながら、つかず離れず、その後を追いかける、とい

う点が重要なのである。つまり銀平は金と同じように「魂のあるやうなやうな生きもの」なのである。

第四部にはそんな銀平の「正体」を補足する一節がある。

蜜狩りの夜、土手下の道を歩いて行く銀平につれて、土手の土のなかを歩いて来る子供も、まだ赤子だった。そしてやはり性別が明らかでない。いくら赤子だつて、男の子か女の子かはつきりしないのは、それに気がつくのと、のつぺらぼうのお化けのやうだ。

(中略)

「しかし幽霊なら、あの子に足はないはずだよ。」とつぶやいた。幽霊に足がないとは誰が見た象徴かと、銀平は昔から自分の仲間は多かつたやうに思った。銀平、自身の足からして、すでにこの世の土を踏んでゐないのかもしれない。

(傍点論者)

赤子はもうすでに死んでおり、今自分が目しているのが赤子の幽霊であるとするならば、その赤子に足は無いはずだ、と銀平は思う。そして語り手は、そんな銀平の足自体がすでにこの世の土を踏んでいない、つまり幽霊とイコールであるかもしれない、と続けるのである。この幽霊のイメージも「魂のあるやうなやうな生きもの」を示すものであるといえよう。まさに銀平はこ

の世を、「現実」を生きてはいないのである。

それでは「魂のあるやうなやうな生きもの」とは、一体どういうことだろうか。

「自我」とは時間的存在である。「過去」の蓄積によって「現在」があり、その「現在」を積み重ねていくことによって「未来」はつくられていく。それと同様に「過去の自己」の蓄積によって「現在の自己」はあり、そして「未来の自己」をつくっていく。そうやって自分を形作っていくために、「自我」は「過去」や「記憶」を整理し、秩序づけ、自己の内部に蓄えていくのである。

では銀平の場合はどうであろうか。銀平にとつては「過去」も「現在」も「幻」も、そのすべてが渾然一体としたものである。そんな銀平には「現在の自己」を組み立てるための確かな自我など備わっているはずがないのではないだろうか。そのような「不確かさ」こそが、「魂のあるやうなやうな生きもの」なのである。

ところが、第四部に入って銀平の存在に、ある異様な変化が現れるのである。

蜜狩りの夜、銀平は町枝と水木の会話に耳を澄ませながら、「この水木といふ学生もこの町枝にここがれてゐるのだと」、水木の恋心を見抜く。また、たとえ入院中の水野の病気が良くなつたとしても「町枝との愛はやぶれるだらうと予感」し、町枝と水野の愛の行く末を語るのである。登場人物の内面や将来への関心、そ

んなことをあの銀平が口走るのだ。さらに、水野のお見舞いに蜚を持って行ったがついている町枝のために、彼女の腰バンドにそつと蜚かごを引つ掛け、その場を後にするというおせつかいぶり。このように銀平は登場人物達の内面を語り、物語の展開を予測し、補助する。それはまるで作者のような振る舞いである。

その後、銀平は「上野の地下道に先生がいらしても行きませう」という久子の「予言的な愛の宣誓か別離の宣告」の言葉を思い出し、実際に上野の地下道へと向かう。そこで銀平は、それまでの女を追いかける役割が反転し、逆にゴム長靴の小汚い女に追われるのである。そして上野の地下道にたむろする浮浪者の様子を、まるで貧民窟ルポルタージュのように語る。ルポルタージュとは書き手の主観を排した客観的な描写によって成り立つものだが、この場面での銀平はまさにその主観、つまり自我を放棄し、客観的視点によって物を見聞きしている。ここに至って銀平は完全に作者化するといつてよい。さて、それは銀平が作品世界を支配する存在になったという事だろうか？そうではない、むしろこれはこの作品における作者という存在が、自己の本性を露呈させてしまった事態である、と考えるべきであろう。この作品において、作者、つまり川端康成は、主人公銀平の「不確かさ」と同質の「不確かさ」を抱えていたゆえに、作者の地位から滑り落ち、主人公の位置に収まり込んでしまったのである。

「確かな自我」を持ち得ない者、それが「魂のあるやうなないやうな生きもの」であり、銀平の「正体」なのだが、このような銀平の自我の在り様が、おのずとはじめに触れた作者川端の自我の問題を浮き彫りにしていく事になる、なってしまうのであった。

注

- (1) この作品は「文藝春秋」に大正十四年八月と九月の二回に渡って掲載された。初出では十四歳(教え年では十六歳)だった川端が書いた日記と、作品発表時二十七歳だった川端による補足と「あとがき」によって構成されていた。その後、新潮社版十六巻本全集の第二巻(昭23・8)の「あとがき」の内、この作品について書かれている部分を、新潮社版十二巻本全集の第一巻(昭34・11)刊行の際に「あとがき二」として追加し、現在の形となる。以下の引用はすべて新潮社刊行の『川端康成全集第二巻』(平成11・10)によるものである。

- (2) 今村潤子「みづうみ」試論(『近代文学論集』昭43・12)
 (3) 兵藤正之助「川端康成論——「みづうみ」を中心に——」(『関東学院大学文学部紀要』昭和62・8)
 (4) 羽鳥徹哉「みづうみ」における魔界(『国文学』昭62・12)

(5) 白石文子「川端康成『みづうみ』」(「玉藻」昭和47・9)

〈あかさか かおり／二〇一三年日本語・日本文学科卒〉

第八十七号 目次 二〇二二年 十一月

〈特集 台湾の日本語文学―一九三〇年代を中心に―〉

台湾教育会編『國光』について……………揚妻祐樹
台湾のプロレタリア文学

―楊逵「新聞配達夫」と呂赫若「牛車」を中心に―

……………横路啓子
短歌と異族―台湾―……………丸山隆司

〈模倣〉という遊び……………横路明夫

加藤景範論

―『藏山集』における小沢蘆庵との関わりを中心に―

……………金子理絵

『羅葡日対訳辞書』における
「こんせつ(懇切)」の現れ方をめぐって……………漆崎正人

一冊 五〇〇円